

見方・考え方を働かせ、主体的に探究する生徒の育成

I 研究の概要

1 本校の教育目標と重点

【 学校の教育目標 】

自ら学び 人とつながり ともに未来を創る

この教育目標の実現を目指し、以下の「目指す生徒像」と「目指す学校像を創る教師像」を重点目標に研究を推進する。

【 目指す生徒像 】

1 【自立】

自ら考え、判断し、行動する生徒

2 【共生】

自他のよさを認めあい、高めあう生徒

3 【創造】

よりよい社会の創造に挑戦する生徒

【 目指す学校像を創る教師像 】

1 【自立】

教育目標の実現に向けて歩み続ける教師

- ・ 自ら進んで学び続ける〈向上心〉
- ・ 謙虚で、礼儀正しい〈人間力〉

2 【共生】

生徒のよさを引き出し、成長を支える教師

- ・ 生徒の成長や進歩を喜び、生徒の心の痛みに寄り添う〈共感力〉
- ・ チーム西陵中の一員として、協力して取り組む〈組織力〉

3 【創造】

持続可能な社会の担い手の育成を目指す教師

- ・ 豊かな学びの場を創出する教師〈創造力〉
- ・ 得意を生かし、学校課題に挑戦する教師〈挑戦心〉

2 研究主題設定の理由

Society5.0 の進展や生成 AI の普及など、社会の変化は加速度を増し、予測困難な時代となっている。このような社会情勢のもと、本校では「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向け、生徒が自らの学習を客観的に把握し、調整しながら進める「学びの自己調整力」の育成を最重要課題と捉えてきた。

研究 1 年次において、本校は各教科の「見方・考え方」を具体的な「思考スキル」として構造化し、ICT を「思考の補助具」として活用する実践を積み重ねてきた。その結果、生徒が自分の理解度に合わせて学習形態を自律的に選択したり、既習事項を「理由づける道具」として活用したりするなどの成果が見られ始めている。

しかし、一方で「誰と学ぶか」という選択が「仲の良さ」に依存し、交流の質が受容や共感に留まってしまう点や、振り返りが単なる感想に終わってしまうといった課題も浮き彫りになった。これらは、生徒が学びの目的やゴールを自覚し、その達成のために最適な手段を選択・調整するという「メタ認知能力」の発達が十分でないことを示唆している。

研究 2 年次を迎えるにあたり、我々はこれまでの成果をさらに深化させ、「なんとなくの選択」から「目的をもった自律的な調整」への転換を図る必要がある。具体的には、提示された課題をこなすだけでなく、生徒自身の素朴な疑問を授業の「問い」へと格上げし、自ら探究のプロセスをデザインできるように授業設計を目指す。各教科の特質に応じた「思考スキル」を生徒がメタ認知し、状況に応じて自発的に使いこなせるよう支援を継続していく。

多様な他者との対話を通じて自らの考えを更新し続け、自律的に学びを切り拓く生徒の育成を目指し、昨年度の歩みを止めることなく、本主題のもと研究を推進する。

3 研究仮説と研究の視点

(1) 研究仮説

「生徒に身につけさせる3つの力」と研究主題との関連から、研究仮説を次のように設定する。

【研究仮説】

仮説1 「個別最適な学び」の視点から

生徒一人一人が自らの課題を立て、その解決に向けて探究するための「学び方」を身につけさせることで、生徒は自らの学びを最適化し、見方・考え方を働かせながら主体的に学習に取り組むようになるだろう。

仮説2 「学びの自己調整」の視点から

生徒と学習目標や学習評価、学習計画を共有したり、ともに作成したりすることで、生徒が見通しをもち、自らの学習状況を客観的に把握し、主体的に改善を図ることができるよ
ニハカズダズニ

(2) 研究の視点

研究仮説検証のため、3か年継続研究を計画し、2つの研究の視点を設定した。各年次研究において重点を定め、仮説の検証と授業改善を進める。

研究の視点	
1	生徒が学び方を習得し、それを発揮することができる授業の設計
2	生徒が自己の学習状況を把握し、学びを自己調整するための学習活動の工夫

視点1では、研究仮説1に関わり、①探究的な学習のプロセスで学習すること、②各教科の見方・考え方を働かせること、③学習方法や学習形態を選択しながら学習することを、まとめて「学び方」と捉え、授業者が主導権をもって「学び方」を習得させる授業と、生徒が習得した「学び方」を発揮して自律的に学習する授業を計画に位置づけることを研究の視点とする。

視点2では、研究仮説2に関わり、生徒が主体性を高めるために、自らの学びを客観的に捉え、ゴールに向けてコントロールする力の育成を目指す。自分の理解度や思考の状況を「モニタリング」し、それに基づいて「今はどの思考スキルを使うべきか」「誰と対話すべきか」を判断できる力を育成したい。具体的には、学習の過程で自分の現在地を確認できるような「評価指標(ルーブリック)」の提示や、自らの変容を自覚し次の学習へつなげる「振り返り」の質の向上を図る。

このように、生徒が自身の学習状況をメタ認知し、最適な学び方を「自己調整」するための具体的な学習活動や支援の在り方を研究の視点とする。

4 研究の全体構造と研究組織

(1) 研究の全体構造

【校訓】「自立」「共生」「創造」

【教育目標】自ら学び 人とつながり ともに未来を創る

【生徒に身につけさせる3つの力】

- 自ら学ぶ力
- 人とつながる力
- ともに未来を創る力

【研究主題】

見方・考え方を働かせ、主体的に探究する生徒の育成

【仮説1】

「個別最適な学び」

生徒一人一人が自らの課題を立て、その解決に向けて探究的に学習するための「学び方」を身につけさせることで、生徒は自らの学びを最適化し、見方・考え方を働かせながら主体的に学習に取り組むようになるだろう。

【仮説2】

「学びの自己調整」

生徒と学習目標や学習評価、学習計画を共有したり、ともに作成したりすることで、生徒が見通しをもち、自らの学習状況を客観的に把握し、主体的に改善を図ることができるようになるだろう。

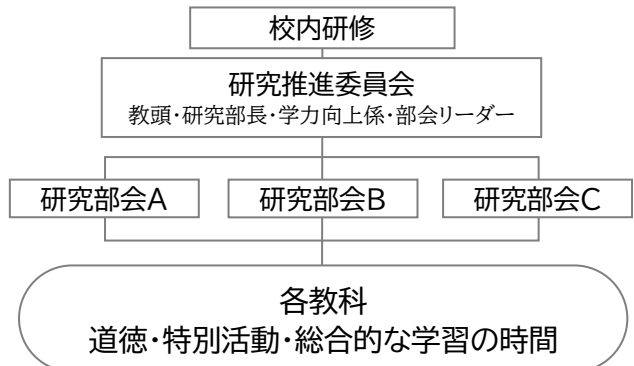
【視点1】

生徒が学び方を習得し、それを発揮することができる授業の設計

【視点2】

生徒が自己の学習状況を把握し、学びを自己調整するための学習活動の工夫

(2) 研究組織



研究活動の活性化、教職員一人ひとりの専門性向上と学校全体の教育の質の向上を目指し、研究推進委員会を組織する。また、授業改善の具体的な取組は、小グループを編成して推進する。

Ⅱ 研究の内容

1 研究の内容と方法

各研究年次における、研究の重点を次のように計画する。

研究の視点	年次		
	1	2	3
1 生徒が学び方を習得し、それを発揮することができる授業の設計	◎	○	◎
2 生徒が自己の学習状況を把握し、学びを自己調整するための学習活動の工夫	○	◎	◎

(1) 生徒が学び方を習得し、それを発揮することができる授業の設計

ここでは、①学習方法や学習形態を生徒自身が選択することを通して、生徒の学びを最適化し、自立的な学習者を育てること、②各教科の「見方・考え方」を働かせ、探究的なプロセスの中で学びを深める力を育むこと、の2点の達成を目指す。

1年次研究では、自分の理解度やペースに合わせて選択する姿が見られ、学習に対する主体性の向上が認められた。一方で、交流が単なる「答えの確認」や「受容・共感」に留まるという課題が浮き彫りになり、また、授業者の支援と生徒の自由度のバランスについても、単元や時期に応じた段階的な調整が必要であることが明確になった。

2年次では「選択の目的化」を徹底したい。「なぜその形態を選ぶのか」「その選択によってどのような学びの更新を目指すのか」という目的意識を自覚できるような声掛けや、他者との協働によって思考が広がる「対話の質」に焦点を当てる。

また、課題設定においては、教科固有の「見方・考え方」が自然と働くような問いの質を向上させたい。1年次で整理した思考スキルを、生徒が「今の自分の思考を助ける道具」としてメタ認知し、自発的に選択・活用できる授業計画を各教科で展開することで、深い学びの実現へと繋げていく。

【視点1 研究方法】

- ① 生徒が学び方を習得する場面、学び方を自立的に選択する場面の設定
- ② 身につけさせたい「見方・考え方」を明確にした授業計画

(2) 生徒が自己の学習状況を把握し、学びを自己調整するための学習活動の工夫

ここでは、生徒が自立的な学習者として自らの学びを客観的に捉え、ゴールに向けて最適にコントロールしていく「自己調整力」の育成を目指す。

1年次研究では、単元末の「振り返り」の記述や、学習形態の選択において、生徒が自らの学びに関心をもつ姿が見られた。しかし、課題として「振り返りが単なる感想に留まる」「選択の目的が曖昧である」といった点が指摘された。これらを解決するには、生徒が「何を学ぶのか(目的)」だけでなく、「学んだ結果、何ができるようになるのか(評価指標)」や「現在の自分に何が足りないのか(現在地)」を明確に意識できる仕掛けが不可欠である。

2年次研究では、まず学習目標を「ルーブリック」や「学習のゴール」等の具体的な評価指標として提示し、生徒と共有することから始める。これにより、生徒は「目指すべきゴール」を可視化でき、学習の過程で「自分は今、どのレベルにいるのか」をモニタリングすることが可能となる。単なる活動の消化ではなく、ゴールへの距離を測りながら、必要に応じて学習計画を修正したり、適切な「思考スキル」を選択し直したりする「調整」のプロセスを重視したい。

また、「振り返り」の質の向上を図るため、単に「できた・できない」の確認で終わらせず、「なぜ解決できたのか」「次に同様の課題に直面した際、どのスキルを応用できるか」といった、学びのプロセスを一般化・抽象化させる記述を促す。また、Chromebook等を活用して「振り返り」を蓄積するなど、過去の自分と比較して自己の成長を実感することができるように工夫することで、生徒が次なる学習への意欲を高められるようにしたい。

このように、生徒が自身の学習をメタ認知し、自ら学習環境や思考方法を最適化し続ける「自律的な学び」の実現に向け、各教科の特性に応じた計画的な支援と、省察を深めるための時間の確保を研究の柱として推進する。

【視点2 研究方法】

- ① 生徒と共有する学習目標や学習評価
- ② 生徒による学習計画の立案と振り返りの充実

2 研究計画

	研修推進委員会	実施日	内容	備考
		〔職員会議〕 4月3日(金)	【今年度の研修内容について】 ・研究主題、研究仮説、研究の視点の確認	
第Ⅰ期 一般研修 & 授業交流1・2	〔保護者会の後〕 4月18日(土)	【研修日①】 4月23日(木)	【今年度の研修内容について】 ・今年度の校内研修について ・推進日程、部会編成の確認 ・検証授業時期、公開研授業者決定 ・授業づくりの留意点、指導案の形式	職員研修アンケート 生徒研修アンケート
	5月18日(月)	【研修日②】 5月21日(木)	【指導案検討1】 ・授業交流1の指導案検討(各部会ごと)	
	【授業交流1】 6月中に実施			
	6月29日(月)	【研修日③】 7月2日(木)	【授業反省1】 ・部会ごとにWS形式での協議 ・全体で成果と課題を確認し、授業交流2へつなげる 【指導案検討2】 ・指導案検討(各部会ごと)	
	【授業交流2】 7月中に実施			
	8月19日(水)	【研修日④】 8月20日(木)	【授業反省2】 ・部会ごとにWS形式での協議 ・全体で成果と課題を確認し、公開研究授業へつなげる 【ミニ研修】	学校評価アンケート結果
第Ⅱ期 公開研究会	10月19日(月)	【研修日⑤】 10月22日(木)	【公開研究授業 指導案検討①】 ・各部会で公開研指導案を検討、交流	
	〔職員会議の後〕 11月12日(木)		【公開研究授業 指導案検討②】 ・推進委員会で公開研指導案を検討	
		※11月24日(火) ～11月25日(水)	【プレ公開研究授業・反省】 ・指導案の最終調整	
		11月27日(金)	【公開研究会】 ・教科の授業を公開 ・部会ごとWS形式での協議	
		〔職員会議〕 12月17日(木)	・公開研究会反省 ・第Ⅱ期までのまとめ	
第Ⅲ期 個人研究・まとめ	12月24日(木) or 1月8日(金)	【研修日⑥】 1月12日(火)	【個人研究 企画】 ・部会ごとに1月中の個人研究について計画	
	【個人研究】 1月中に実施			
	1月28日(木)	2月1日(月) ～5日(金)	【研修アンケート】 ・1月の個人研究の成果と課題 ・今年度の校内研修の成果と課題 ・次年度の展望	
	2月15日(月)	〔職員会議〕 2月18日(木)	【研究のまとめ】 ・成果と課題、次年度の校内研修への展望	職員・生徒アンケート結果